

5 福島県双葉郡消防本部派遣隊員の 手記

5 福島県双葉郡消防本部派遣隊員の手記

平成 25 年 6 月～8 月に派遣された本市消防局職員による隊員手記（6 名）

（1）第一回派遣職員

派遣期間：平成 25 年 6 月 22 日（土）～平成 25 年 7 月 5 日（金）

○ 門司消防署警防課警防第三係 消防司令補 雪吹 忠紀

発災直後の地元消防の活動については、まったく情報が入ってこなかったが、派遣中に実施された研修等により当時の双葉消防の激務を知ることが出来た。

また、2 年以上経過した今でも、地域状況は発災当時と変わらない部分が数多く残されていることにも驚かされた。

現在では、双葉地区内において昼間は除染業者 3 0 0 0 名程度により除染作業を実施しているため、主要道路である国道 6 号線などは、渋滞が起こるほどで活気があるように錯覚しそうになるが、夜間になるとまったく人車の往来はなくなり、住民のいなくなった町は、いたるところに雑草が生い茂り、荒れ果てている。出会う者は作業服にマスク姿の作業員か警察官だけという状況で、子供がまったくいないことに違和感を感じた。震災はまだまだ終わっていないことを痛感させられた。

このような状況の中、自らも被災者という立場でありながら故郷を取り戻すために必死で尽力している双葉消防の皆さんの姿に感銘を受けた。

本派遣で、災害の恐ろしさ、家族、故郷等々について改めて考えさせられ、自分にとって大変意義深いものとなった。



○ 小倉北消防署警防課警防第二係 消防司令補 藤吉 重扶

（派遣前）

派遣前は、事前情報で比較的安全だということは分かっていたが、実際に現地に行ってみないと分からないことが多く不安でした。

（家族の反応）

家族には、双葉消防本部派遣が決定した後に伝えた。現在の状況を伝えたことで、少しは不安が解消された。家族は快く私を送り出してくれた。



(派遣を終えて)

双葉消防本部管内の現状は想像していたより除染活動が進んでいた。しかし、地震から2年が過ぎても倒壊した建物はそのままの状況であり、ライフラインは主要な幹線道路とその周辺の電力だけが回復しているが、肝心の水道はほぼ復旧しておらず、とても一般生活ができるとは思えないのが現状であった。このような状況の中で、今後も対応していく双葉消防職員のことを考えると、たとえ派遣が終了しても今後もなんらかの支援が必要なのではないかと感じた。

双葉消防本部の派遣を踏まえ、全国の消防職員の気持ちはひとつであり、絆の強さをあらためて痛感することができた。私も消防職員として今後も皆様のお役に立てるよう一所懸命がんばっていきたいと思います。

○ 八幡西消防署警防課警防第三係 消防士長 橋本 輝

現地の状況により、津波の恐ろしさをまざまざと見せつけられました。放射線の怖さを知りました。

住宅地だった地域は基礎部だけを残し、何も無くなっている地域、家があるなどと思って見ていると津波により400メートル移動していると聞かされた。

また、帰還困難区域に行くと、町の建物などはそのままなのに、人がいない、犬・猫がいない、生き物がいない死の町となっていました。

私達が派遣された双葉消防のみなさんは、亡くなられた親族や、避難のため家族と離れ離れとなっている中、「風化してはいけない」を合言葉のようにしてがんばっています。

復旧、復興はすすんでいません。



巡回する派遣職員
(25年6月30日)

(2) 第二回派遣職員

派遣期間：平成25年8月22日（木）～平成25年9月4日（水）

○ 小倉南消防署警防課警防第二係 消防司令補 徳井 昭宏

私が今回の派遣を希望したのは、東日本大震災時に災害派遣に参加できなかった悔しい思いとその後の被災地復興に何か力になりたいとの思いからでした。

出発まで、福島県双葉郡の現状は、報道などで知る一部の情報しかなく、放射線被害についても情報が少ない中の派遣に不安があったのも事実です。

しかし、選抜されたからには、北九州市消防局全職員の代表として、全力で使命を全うすることを自分に言い聞かせて出発しました。

「これが同じ日本の中で起こっていることなんだ。ここはなんてきれいな町なんだろう、放射線が無ければ・・・。」

これは、双葉郡での派遣活動の中で、初めに感じたことでした。派遣期間中、幸いにも災害出動はなく、特に危険な環境での活動はありませんでしたが、制限区域内での警戒パトロール中の空間線量の上昇や誰も住んでいない町の光景は決して忘れることができません。

派遣活動を終えて今思うことは、双葉消防の職員と一緒に勤務し、彼らの実直なまでに地元を愛する心を感じ、また他都市派遣隊との交流の中で、消防職員の気持ちはどこでも皆同じですばらしいと感じたことです。このことは、今後の消防人生で大きな道標になると思います。

また、双葉消防の方に震災時から現在に至るまでの想像を絶する困難な状況や思いを聞き、鬼気迫るものがありました。消防職員は、このような放射線災害があった際には、町を守るという崇高な思いからの消防活動と、自分自身の身を守るということの葛藤や苦悩は避けて通れないことを考えさせられました。

そして、彼らは自分たちの町の行く末を案じながらも、希望を失わず勤務していることを肌で感じました。

帰局の際、双葉消防のある方からの「あなた達の町で同じことが起これば、必ず助けに行きます。」との言葉に、かつて誰も経験したことのない状況に立ち向かっている力強さや私たちへの感謝の気持ちが表れていたと思います。

これからも、この地域の困難は続いていきます。今後また何かの形で支援していきたいと思うと同時に、少しでも早く復興、復旧が進むことを願ってやみません。



○ 門司消防署警防課警防第一係 消防司令補 眞崎 隆央

双葉消防本部の職員が気さくな方ばかりで、職場の雰囲気が高く、一緒に勤務した派遣隊の川崎市消防局の職員も頼もしい方ばかりで、気兼ねなく話をする事ができ、とても良い環境で勤務することができた。

また、当務と非番を通して、積極的に意見交換を行うことができ、大変、有意義な2週間であった。

派遣を通して、双葉消防本部の職員から、震災当日から今日までに行われた消火、救助、避難誘導等の活動、原発事故への対応や現在の管内の警防対策に係る業務内容等を聞いたこと、受援に至る経緯やそれに向けて作成した詳細な資料等を見たこと、警戒パトロールにおいて発災直後の写真と変わらない現況や荒野を見たこと、警戒区域内で、蓄積される放射線量をポケット線量計の音で確認しながら活動したこと等から、これまでに双葉消防本部の職員に過酷な活動や膨大な労力がかかっていることと自分達のまちを再建しようとする思いが込められていることを実感した。

現在も、遠方の仮設住宅に住む避難者への予防広報活動や除染者の宿泊施設建設に伴う消防検査、瓦礫の温度測定、モニタリング、行方不明者捜索等の業務等、双葉職員の業務は膨大であり、日々変化する放射線量への対応や新たな課題が生じる等の、目途の立たない先行き不透明な状況での活動が続いている。これを軽減するため、他機関との連携強化や事務手続きを簡素化するなどの措置が必要であると感じた。

双葉消防本部が震災の対応で苦勞したこと、今も苦慮していることは、原発事故に関するものが多く、本市においても、大規模な災害が発生したときや専門性の高い事象で専門的な助言を得ることができないときに、どの様に情報を収集、整理し、また、目途の立たない先行き不透明な状況のときに、どの様に拙速に意思決定を行い、伝達、周知を進めていくかを検討する必要があると感じた。

今後、今回の派遣で得た知識や経験を整理して、所属職員に伝達するとともに、本市の大規模災害時の警防対策や危機管理体制を一層、強固とするため、少しでも組織に還元できるように切磋琢磨していきたいと思う。



○ 八幡東消防署警防課 警防第三係 消防士長 安増 啓二

私は、平成25年8月22日から9月4日までの間、第13次福島支援全国消防派遣隊員として双葉消防における支援活動に従事しました。

派遣前、不慣れな土地で勤務することや原発事故後の放射線のことから不安でした。また、6当務2週間という期間で被災者でもある双葉消防に対し、私ができることは何なのかを考えていました。

双葉消防での主な仕事は災害対応の他、放射線による制限区域内の警戒活動です。制限区域内は、警察官、除染関係者、東京電力関係者のみで住民はいません。変動する空間線量計の数値から、放射能は少なからず飛散しており、原子力災害は継続中であることを実感しました。

空間線量の高いところでは、建物は倒壊したまま、雑草は伸び放題、警戒活動中に野生化した猪豚や牛を見ることもありました。

支援活動を通して感じたのは、双葉消防の職員一人一人が故郷を守るという高い志、苦難を共にしてきた仲間を思う強い絆、また全国から派遣された職員達から何かを学ぼうという熱い思いです。制限区域全てが解除となり、避難した住民が戻ってくる日まで長い戦いになりますが、双葉消防は必ず故郷を守り続けるでしょう。

私が双葉消防で見たこと、体験したことを一人でも多くの人に伝えようと思います。



被災当時の様子をとどめる駅舎
(25年6月28日)



放射線量チェックを受ける隊員
(25年7月2日)

